



「琵琶湖一周サイクリング、いやあ実に面白いですね。複数人で織りなす援助は、実にいいですね…」。

「こんな反応を（上）を読んだ心理臨床従事の方から戴いた。様々な援助メニューがあるはずなのに、状況が厳しくなっているという思い」みからか、実践はどんどん硬直化している気がする。面白そうなことは何でもすればいいんだし、上手くいくかどうかなんて、誰にも保証できるものではない。

もつと自由度の高い取り組みが日本のあちこちで、展開されていいのだと思って、この別冊を連載した。

憂一は気持ちがコントロール出来ない子でしてね。
言い出すとしつこいんです。
それで嫌がられまして、
友達が欲しいものだから
お菓子を配つたりして。
結局、学校には居場所がなくて…

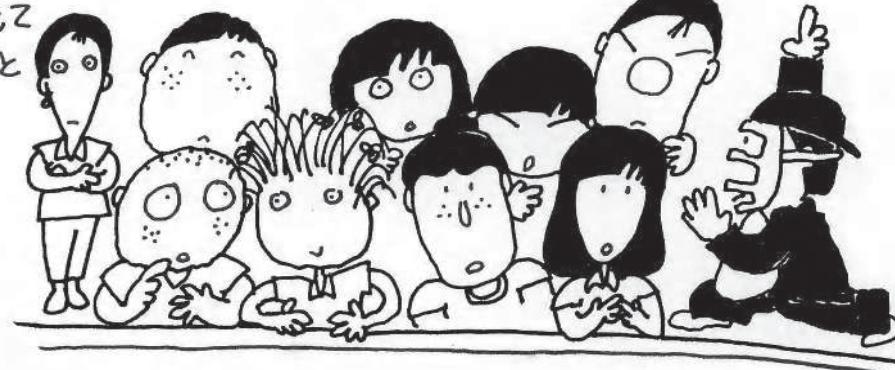




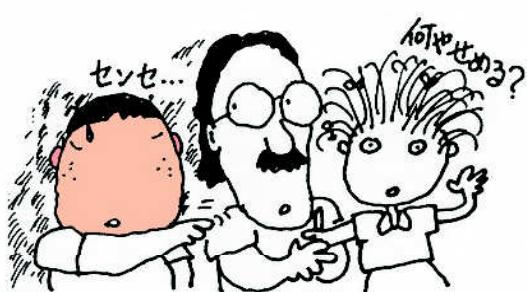
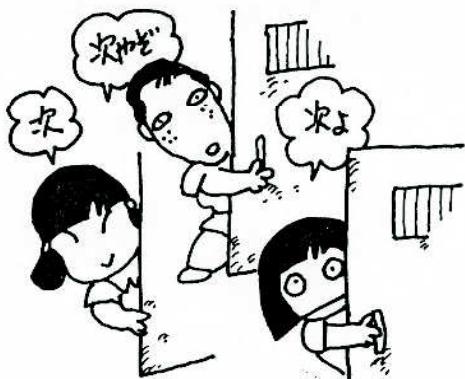
何かの間違いじゃないだろうが…
今回の参加者に
万引きや窃盗
が主訴の子
は居なかった
はずだけど
…



私としてはあいまいな金銭的結着
では責任を果たすことになります。



一人ずつの面談が始まった。
スタッフを半分に分けて半数は
待っている子ども達と一緒にいた。
我々にとっても、初めての経験
だった。サイクリングはこの後、
どうなるのだろうと思つた。



憂一は面談で事件のこと話をした。

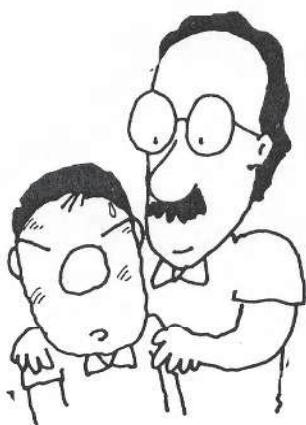
せめるも気を遣いながらも

本当のこと伝えようとした。

憂一が謝りたいというので、

他の子達の気づかないときに

YHのペアレントの所に行かせた。



戻つてくるのを待つ間に私は
憂一が我々のメンバーの一員であることを強く
感じているのに気づいた。



いろいろな」とがありながら
琵琶湖一周サイクリングは
つづいていく。

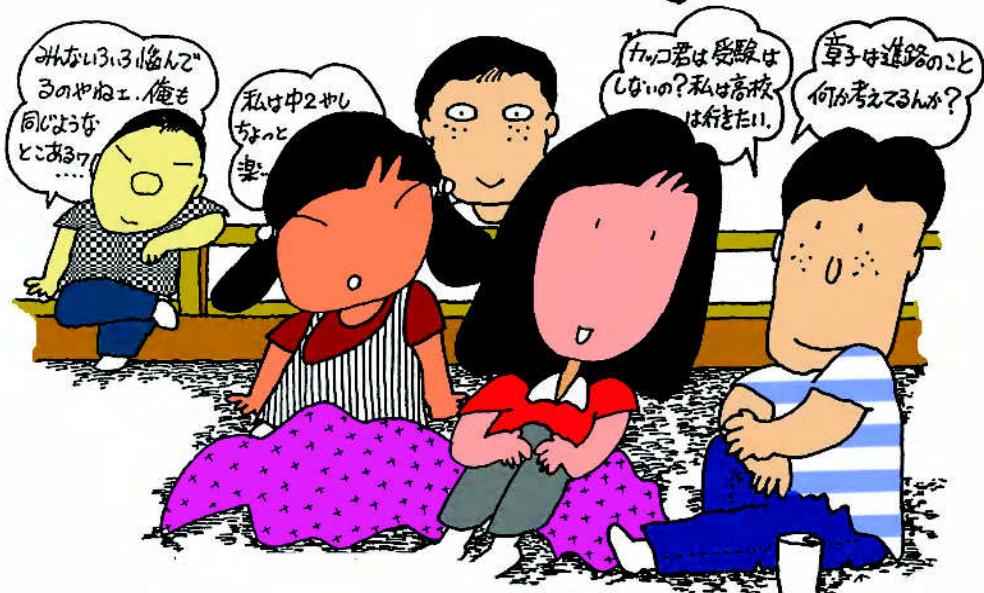


夕食が済んで、入浴も済むと
職員の方は、一日の疲れから
ウトウト……

YHには男女別にベッドルームがあつて、消灯時刻など、そこそこ規則は厳しい。しかし私達一行のことよく理解してくれている

「ペアレントは

ずっと大目に見てくれている。



その結果、
開放された部屋で、
子ども達は夜遅くまで
話し込むことになった。



サイクリング中のルールは出来るだけ、

ナシにしていた。睡眠も消灯も、

眠りたい人のじやまをしない」と、

それだけだった。その結果彼らは、
参加者から友達になりつつあった。

この夜あたりから、早朝まで

話し込む者が出てきた。

おっさんの我々がこんな事に
付き合っていては体がもたない。



船を漕ぐとは言うが、
自転車をこぎながら
居眠りする子が
いるのには驚いた。

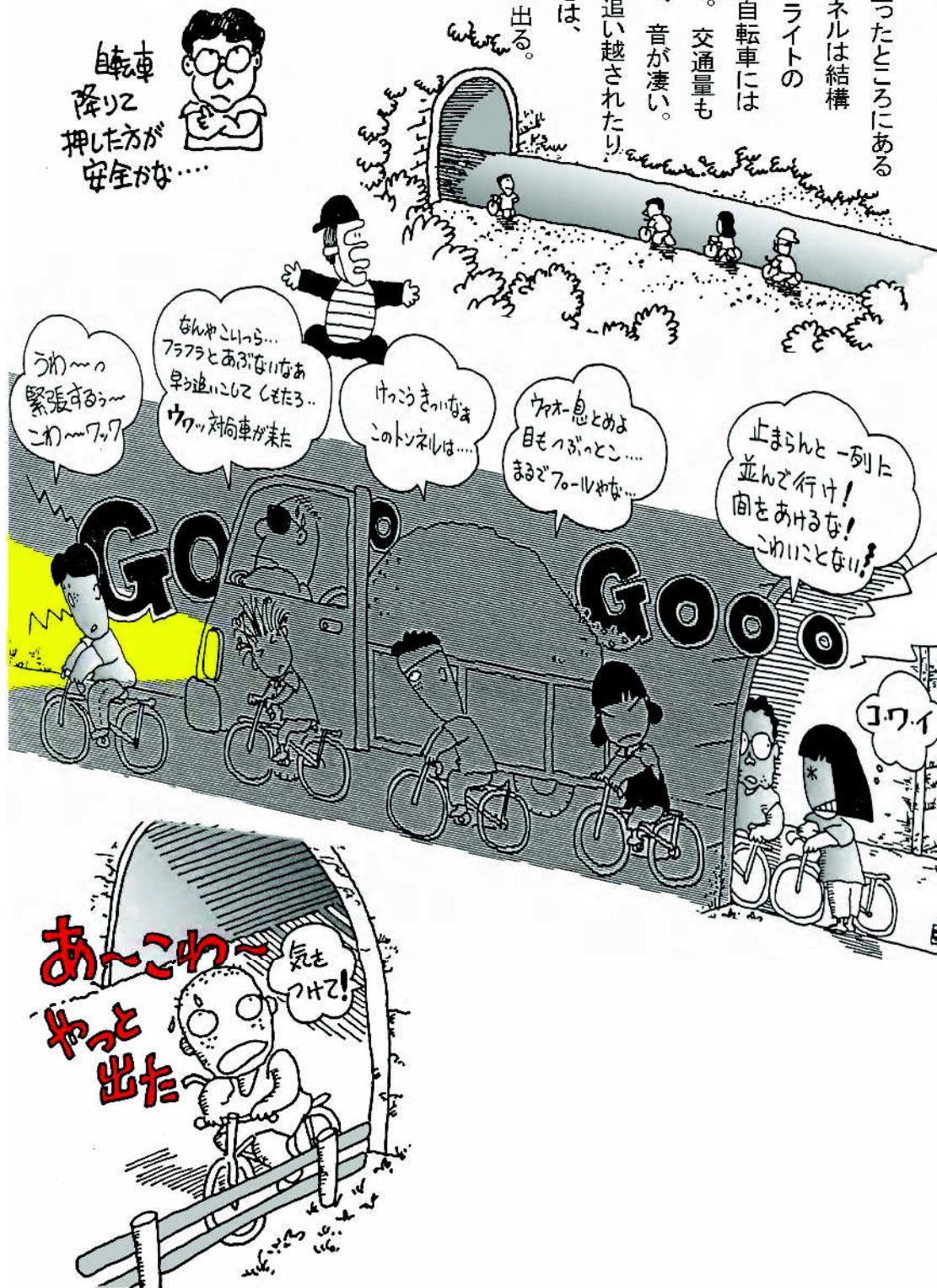
もうすぐ岩熊トンネルや
一番の難所やから緊張して
進めよー



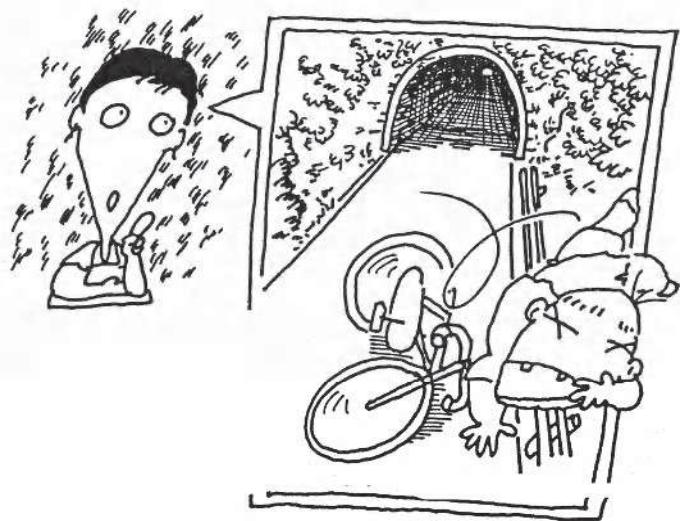
急坂を登つたところにある

岩熊トンネルは結構
長いし、ライトの
付かない自転車には

中は暗い。交通量も
多いので、音が凄い。
ダンプに追い越されたり
するときは、
冷や汗が出る。



今回は大丈夫だったけど、以前、
トンネルを抜けたうれしさで
下り坂を一気に猛スピードで
降りて転倒して、病院に連れて
走了」ともあったのよ。
あの時は本当にビックリした。



その子なあ、頭に怪我してたから
帰そうと思つたんやけど、
「完走したいしたい」って言うてね、
次の日一日キャンプ場で休んで、
また、走ったんやで。



朝から快調に
走つて来ていた。





水着になる」とで、
こんなにイロイロあるとは、
予想していなかつた。
しかし他人の視線や評価が
人一倍気になる彼らを
思うと、分かる気がした。
だから頑張りどころだとも
思つていた。
そしてゆったりしていると
眠くなつてくるのだった。



夕食は焼き肉。パーティー。
食後の片付けも章子は積極的。
女子のリーダー的存在になつてきている。



夜は定番のキャンプファイアーだが、
これくらいの人数では盛り上がらない。



それより、大うけするのがカラオケ。
慣れた子もいるが、初めての子もいる。
嫌がったり、独り占めしたりしながらも、
みんな乗りにのる。
他には誰もいなくなつた浜辺で、
大いに盛り上がる。



でも一方、自分たちの今後の
ことを真面目に話し始めている
グループもある。
不登校について各々が語り
出しているのだ。
その数人が、とんでもない
ことを思いついた。



寝ぼけ頭がだんだん戻ってきて、突然、目が覚めた。



泳ぎの得意なスタッフを起して相談した。





沖に向かって漕ぎ出した。月夜の湖は
 想像を遙かに超えて、神秘的だった。
 波の音しかない全くの静寂。



大声で話す
 者もなく。
 みんな月の
 光の中で、
 自分の心と
 話し合って
 いるみたい
 だった。



一時間程で岸に戻った。着いてからもみんな、あまり口を開かなかった。午前二時前になっていた。それぞれテントに戻って、静に眠りについた。



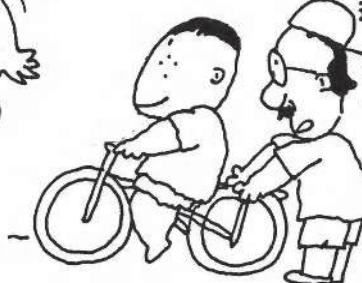
日に日に仲良くなつていつたり
肌が小麦色になつていつたり
みんながお喋りになつていつたりした。

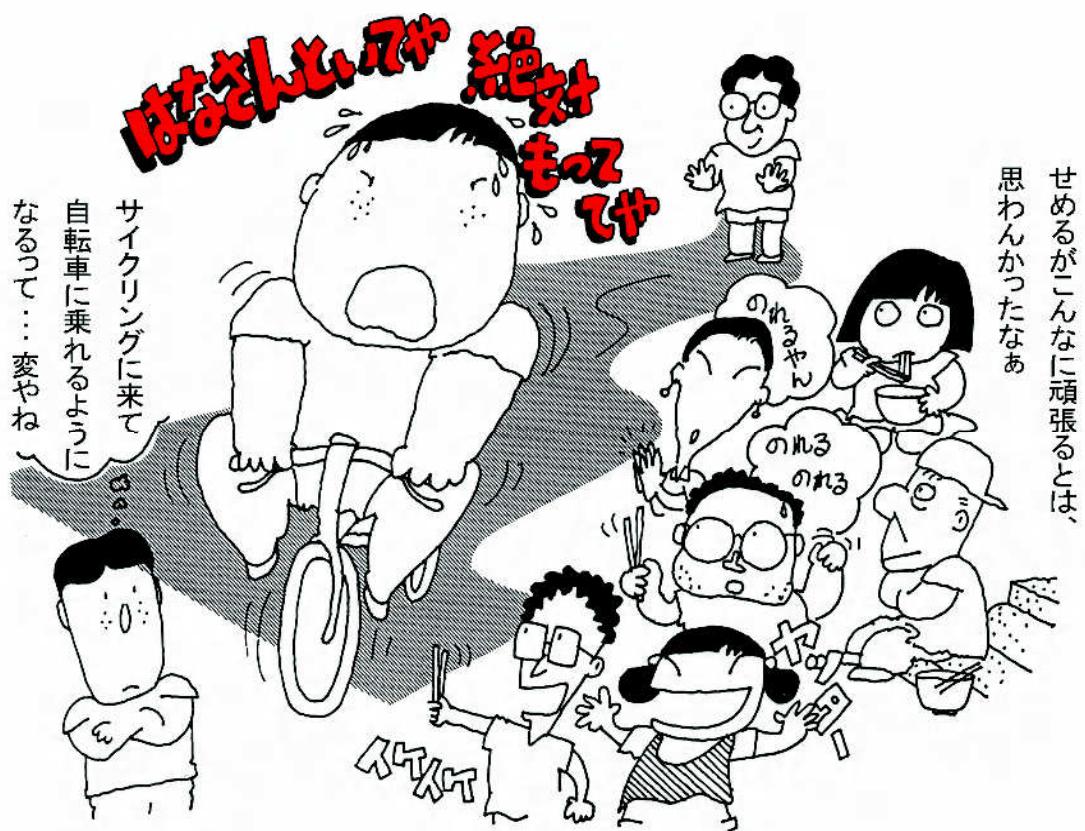
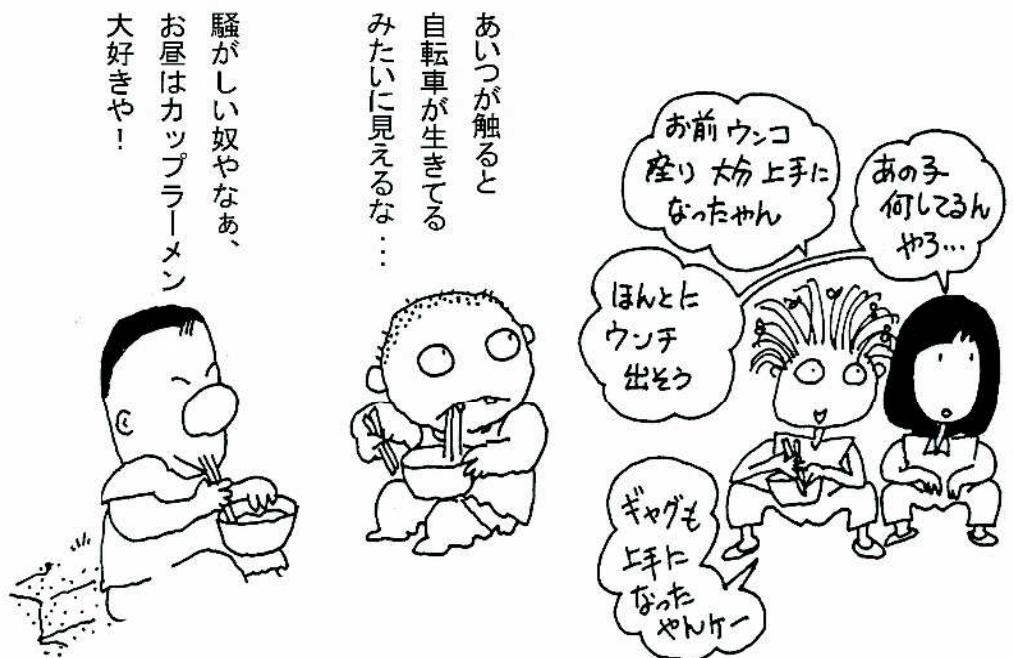


最初は通りすがりに、
チョット自転車を
触つたりしていた。
それに日に日に上手になつていつたのが、
せめる君の自転車だった



コラッ、
進め進め
座椅子と
ちかうんや
がら!!

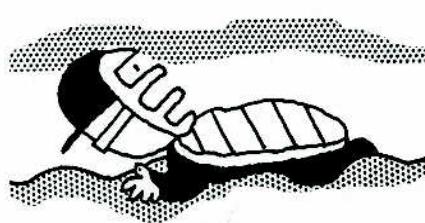
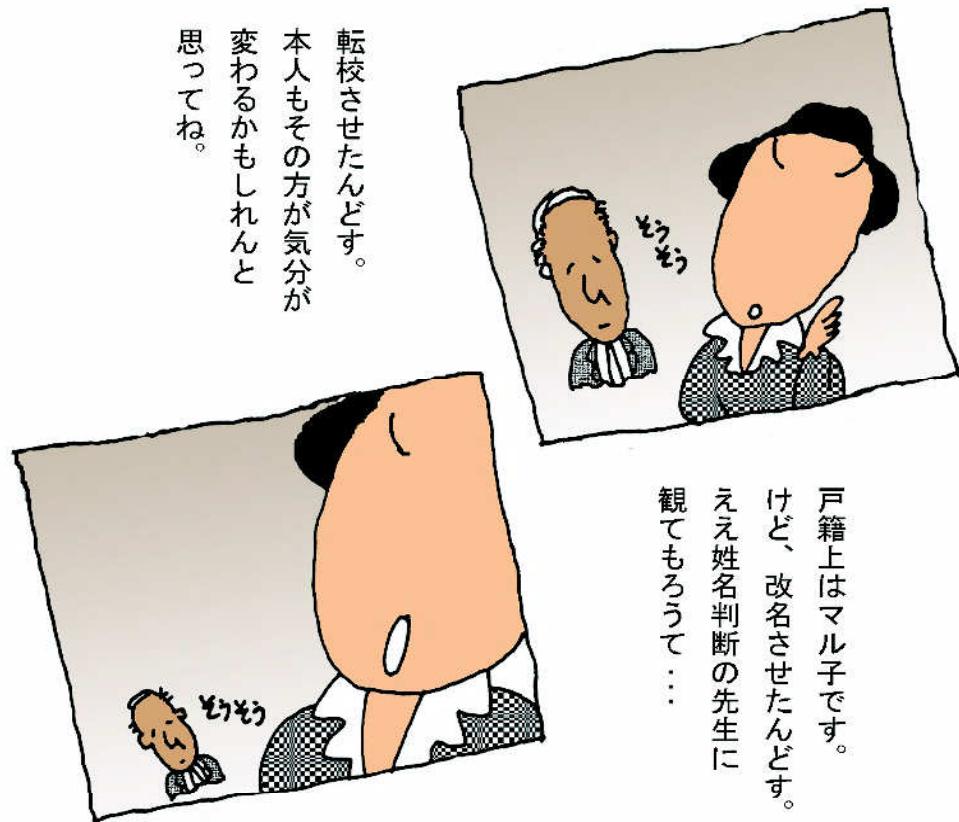




車の助手席に乗って、樂をしているデブのこと、最初は関係ない感じやつた。
でも、昼休みになると、飯食ってる僕らの前で
フラフラ練習しよる。
サークスの熊みたいで、笑ってたけど、
応援してたんやで。せめるが一人で
乗りよつた時、みんな凄く
嬉しかつたと思うわ。







得手、不得手も人それぞれ。

苦手のない人はいないが、

彼女の苦手は料理。

本当に何もしたことがない。

包丁を持った経験もない。

ただただ、食べるだけ。



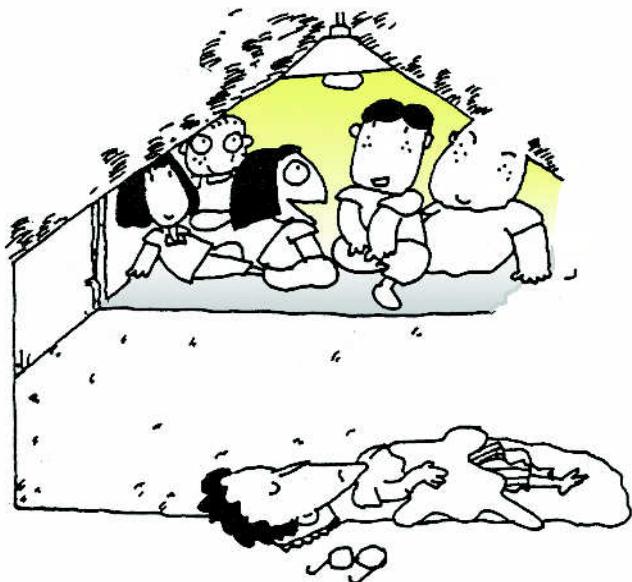
意地になっちゃって！

誰でも苦手はあるんやから、
それなりに手伝つてたら
ええのよ。

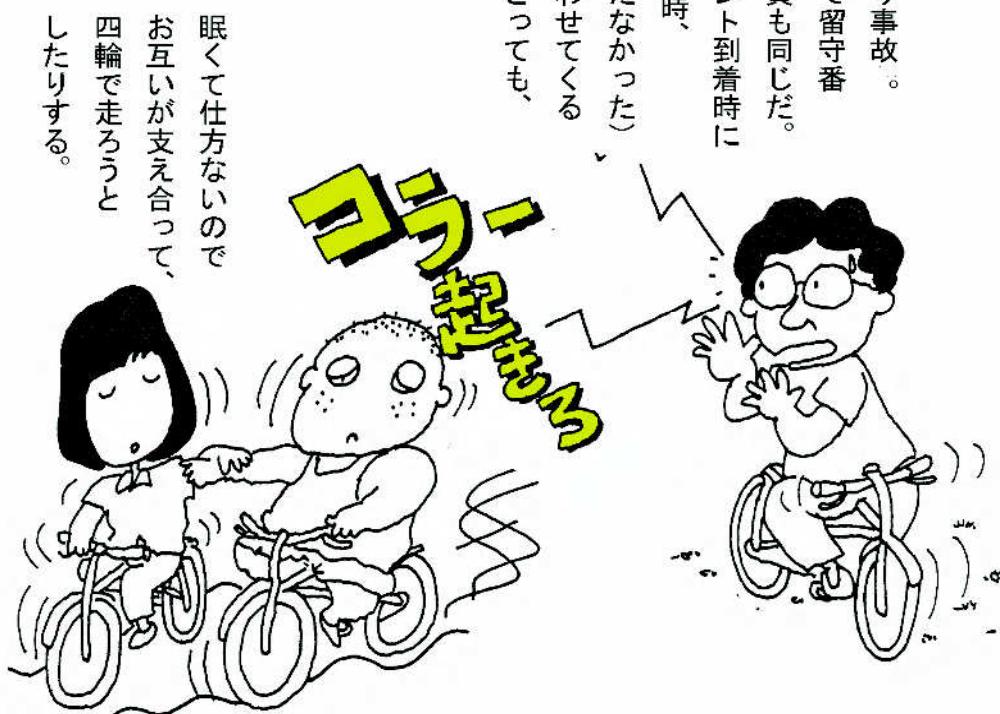
そんなこと言つてたら
他の人と上手いこと
やってけへんよ！



夜は新しくできた仲間と、出来るだけ
自由に遊びさせてやりたいと思う。
でもその結果、寝不足集団が
出来上がる。サイクリング後半は
居眠り運転が続出だ。



一番の心配はやはり事故。
それは児童相談所で留守番
してくれている職員も同じだ。
毎日出発時とポイント到着時に
電話を入れる。(当時、
ケータイ電話はまだなかつた)
中には毎日問い合わせてくる
親もあった。親にとつても、
結構な試練なのだ。



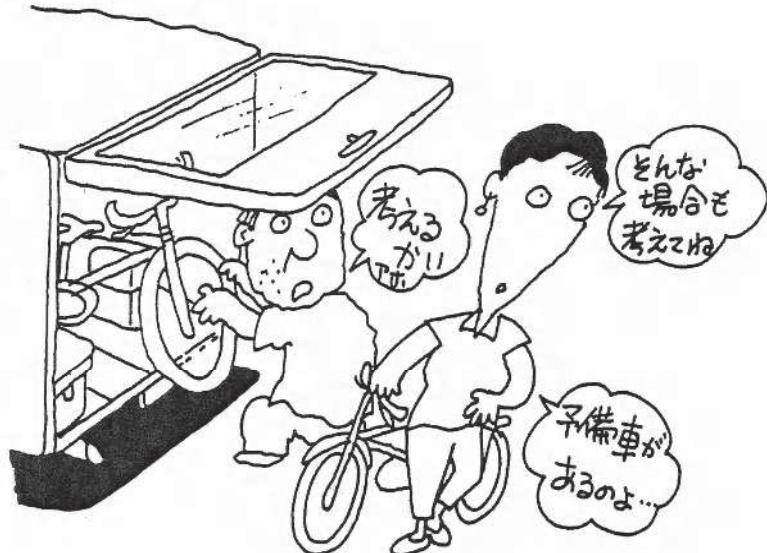
事故はスタッフにだって起っこ。
そもそも多分ヒゲがやる
だらうと思ついたら、
やっぱりそうだった。
事故多発型の人はいる。
サイクリング中の事故は
危険な場所より、比較的安全な
ところで起きる。油断
するのだろう。



走行中に、
自転車が半分に
折れた。
考えられない
ことだが、
実際に
あつた話だ。



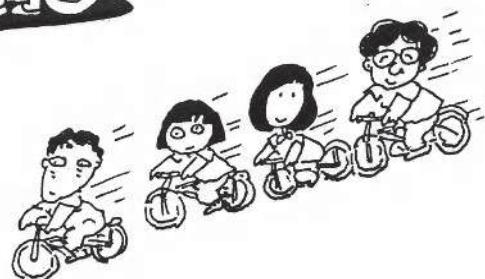
春、夏あわせると、10回以上実施したサイクリング。想定内のハプニングや小さなトラブルはある。それに加えて、チヨツト想像しがたい出来事も起きる。これが下手をすると事故になる。



最終日の朝は早い。
ゴール地点に
正午までに着きたい。
出迎えのスタッフが、
お弁当を用意して
待ってくれて
いるからだ。



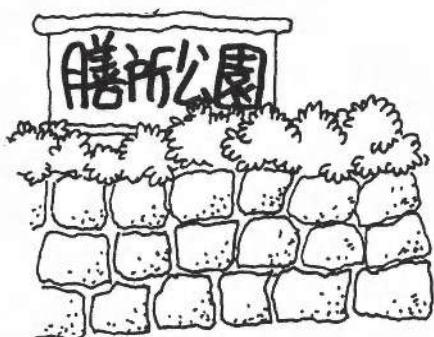
六時前に起きて、
片付けて六時半に
出発。
朝食は少し
走つてからだ。





いよいよゴールだと思うと、ピッチが上がる。
昨日までなら、一日の行程だった距離を
グングンとばして半日で駆け抜ける。
大津市内に近づくと、交通量も次第に多くなる。
しかし身のこなしはもう立派にサイクリストだ。

みんなの提案で
せめる君は
ゴール直前の
一〇〇メートルを
一緒に自転車で
走った。



とうとう琵琶湖を一周した全員が揃って、出発点の膳所公園に「ゴールイン」である。

200km余りを走りきつた達成感はなものにも代え難い。

出発時のことを思うと、みんな随分成長したような気がした。



新学期が始まった。

それぞれが自分の家で、

九月一日を迎えた。

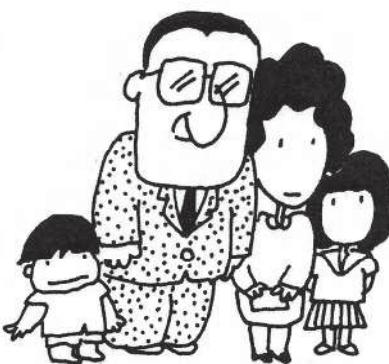
登校し始めた子もいたし、

そのままだった子もいた。

三年生の子達にとっては

いずれにしても大きな

分かれ道だった。



ランボーは家でも学校でも、
誰彼かまわず、サイクリングの
楽しさや、彼女のことを喋りまくった。
みんなゲラゲラ笑いながら聞いてくれた。
時々ツツパリツ子に電話した。
もう暴力をふるうこととはなかつた。

章子の家族は、その後も家族面接に
来続けた。本人は同行したり、
しなかつたりだった。

三学期になつて姉の態度に対する

妹の不満が火を噴いた。

平和だった一家に波風が立ち、

章子は混乱して面接中に号泣した。

その後しばらくして、高校進学を
強く希望し、目指す学校に入学した。





カツコ君は時々、
学校に行きだした。
母親にはチヨット
距離を置き始めていた。
『帰宅してから、
様子がおかしいんです!』
と母親から相談所に
電話がかかってきたりした。



憂一は先生に勧められて
陸上部で長距離を走り始めた。
予想外に記録が伸びて、
地区大会で入賞もした。
その頃から、父親と二人で
釣りに出かけたりする
ようになつた。
母親だけがその後も、
半年余り、近況報告の面接に
通い続けた。



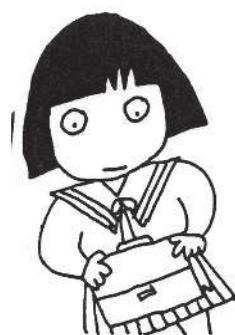
せめる君は帰宅早々に自転車を買ってもらい
街中を走り回った。その後、本人も含めて
みんなで今後のことを相談した。
その結果、残り半年の中学生生活を施設で
心身を鍛えることにした。
卒業後、ぐっとスリムになつた彼は、父親の
仕事を手伝つて頑張つていると聞いた。



スポーツウーマンの
彼女は、相変わらず、
学校には行かず、
元気にスポーツクラブに
通いつづけた。



二代目は結局、学校には
行かないまま、卒業を迎えた。
そして父親と同じ
焼き物の仕事を
することになった。



彼女は新学期から
登校し始めた。
不安になると章子と
電話で話した。
学校に行けていない章子が
彼女を励ました。
そしてほとんど出席して、
三年生になった。



ソッパリちゃんは相変わらず楽しんでいた。
一度は遠方のランボー宅まで出かけて、
お母さんに大歓迎してもらつたりした。
適当にさぼりながら、中学生生活を
楽しんでいた。

『外泊することがなくなつたのが安心です』
と両親は語つた。

これが九人のそれからです。
サイクリングが不登校に
効果的なのかと聞かれても、
何とも言えません。

ただ、人の心には元気の素が
必要だと思います。

九人の一週間のドラマは
彼らの元気の素には
なれたのではないでしょうか？



「過去は一つの異国である」、こんな言葉を
目にして、心が動きました。
久しぶりにこのあの頃の自分と仲間達、
そして向き合つてくれていた
子ども達のことを思い出しました。
琵琶湖一周サイクリングは、
誰かがしたことではなく、
みんなで行つた心理臨床的営みだと
言えるように思います。

